

論文の概要および審査結果の要旨

氏名（本籍）	金 俊佑（大韓民国）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	甲第101号
学位授与の日付	平成31年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条第2項
学位論文題目	中辺分別論における空性の研究
論文審査委員	主査 松田 和信（佛教大学教授） 副査 森山 清徹（佛教大学教授） 副査 高橋 晃一（東京大学准教授）

〔1〕論文の概要

金俊佑氏の学位請求論文は、唯識学派（瑜伽行派）を代表する論典である『中辺分別論』に基づいて、唯識学派が空をどのように理解したのかを考察したものである。唯識学派の空の理解は初期経典以来の伝統的な「空性の定型句」に基づくが、本研究は「空性の定型句」とともに唯識学派の空理解の特徴となっている「無の有」に焦点を当てて、唯識学派が空をどのように解釈したかを解明する。さらに「無の有」を手がかりとして唯識学派の空と「般若経」の関係を考察する。本論文は唯識学派の空理解に対する思想研究の前半部と『中辺分別論』の翻訳研究を提示する後半部の二つに分けられるが、各章の概略を紹介すれば以下の通りである。

第1章《「無の有」とは何か》「空性の定型句」との関係から「無の有」の意味を解明する。「空性の定型句」が示す概念は、空が有と無の一方だけを意味するのではなく、双方の意味を有するというを表す。定型句による空理解は『菩薩地』『阿毘達磨集論』『顯揚聖教論』『中辺分別論』といった初期唯識学派文献に共通して認められる。これらの文献では、定型句の中の、空なる存在を除いた「余れるもの」の規定をめぐって二つに分かれる。『菩薩地』はそれを事物と規定するが、『阿毘達磨集論』等では無我性や空性、つまり否定される対象を抽象化したもの（無の有=無という抽象性）と規定される。『中辺分別論』における「無の有」は『阿毘達磨集論』等の空理解と同様、所取・能取の二取の否定そのものを抽象化したものである。『中辺分別論』は「無の有」と定義される空性を「空

性の定型句」を通じて解釈する。従って『中辺分別論』における「無の有」は『阿毘達磨集論』の系列に属する「空性の定型句」を継承するものである。さらに『中辺分別論』の復釈においてスティラマティ（安慧）は「無の有」である空性が諸法の本性として存在すること、さらに二取が絶対的に無であることを表していると理解する。従って「無の有」は一切法が絶対的に空であることを存在論的に確立させる概念である。空の絶対性を確立させること、これが「無の有」の意図するものである。「無の有」を特徴とする空性は、諸法に普遍的に存在する本性であり、法性である。唯識学派は諸法に空性という自性が存在することを認める。従って「無の有」を通じて空性を定義する空理解は「自性肯定的」と言える。諸法が自性とするものは「二取の無」という本性、つまり空性である。故に、唯識学派が空性の相として挙げる「無の有」は「二取の無」あるいは「自性の無」の絶対性を存在論的に確立させる概念である。

第2章《般若経の空と「無の有」》唯識学派の空と般若経の空の関係を「無の有」を中心に解明する。「無の有」という概念の起源が増広般若経の「無を自性とする（abhāvasvabhāva）」という概念に影響を受けていることを明らかにする。般若経は増広される過程で空に対する記述様式の変化を見せる。最初「一切法は空である」とのみ説かれるが、やがて「自性の無」という自性を認めて、「一切法は無を自性とする」というように変化する。従って『中辺分別論』の「無の有」と般若経の「無を自性とする」は、両者とも自性肯定の思想である。これは無著の著作より前に成立した『光讚般若経』においても自性肯定の意味として用いられる。さらに本章では、唯識学派が般若経の空を自性肯定的に理解したことを『金剛般若経』に対する無著の釈偈である『七十頌』と世親の『頌釈』を通じて確認した。『金剛般若経』には空という語が登場しない。その代わりに逆説的否定論法（即非の論理）が繰り返し現れる。これは一切法には自性がないことを表し、一切法の空を説くものであるから、『金剛般若経』は空という語を使わず空を説いていると言える。これによって表現される存在のあり方は「無自性」である。『七十頌』と『頌釈』は法に自性がないことを「無」と「無の有」という語で注釈する。「自性がない」ということを「自性のないことを自性とする」と言い換えているのである。これは一切法に無自性という自性を認める思想である。唯識学派の空理解は初期経典のみならず般若経にも基づいていると言える。

第3章《空と三性》 唯識学派の三性説と空の関係を解明する。般若経の「弥勒請問章」に見られる遍計・分別・法性の三相に対する解釈を手がかりとして、般若経の空と唯識学派の三性説との関係を論じる。これによって三性が空性と無関係ではないことを示す。三

性説は変遷の過程を経て形成されたものである。それは円成実性の定義の変化から確認できる。『解深密経』『摂決択分』等では円性実性は真如と定義されるが、『中辺分別論』『唯識三十論』等では円成実性は「遍計所執性の無」と定義される。この変化は唯識学派の空に対する理解に起因すると言える。遍計・分別・法性の三相に関する唯識学派の解釈から見れば、三相は『阿毘達磨集論』において空性と解釈されていたが、『中辺分別論』においては三性と解釈されるに至る。これは空性が三性に代替されたことを示す。円成実性の定義の変遷から見れば、三性説は空と結合する形で形成されたことが分かる。『阿毘達磨集論』等における空性の定義が『中辺分別論』においては円成実性の定義として登場するからである。従って、三性説は既存の空思想を取り組む形で展開されたと言える。これによって『中辺分別論』の思想史的な重要性も明らかとなる。『中辺分別論』の段階に至って三相は三性に解釈され始め、三性説は空と結合する。唯識思想史において、『中辺分別論』は唯識学派が空から三性へと思想的転換を果たす起点になる文献である。

第4章《翻訳批判》『中辺分別論』の主要概念である「虚妄分別（abhūtaparikalpa）」という複合語、さらに空性を定義する時に登場する grāhyagrāhakabhāva という語句に対する既存の翻訳を検討する。複合語の解釈に関しては、『中辺分別論』は虚妄分別を格限定複合語として理解している。これを真谛の漢訳、および窺基と安慧との注釈から論証した。従って『中辺分別論』における虚妄分別は「虚妄なるものに対する分別」を意味する。一方、他文献では、虚妄分別が同格限定複合語として解釈されていることも認められる。虚妄分別という複合語には二つの表現様式と、二つの解釈傾向があるということが結論される。さらに grāhyagrāhakabhāva という語句の適切な訳語について考察する。『中辺分別論』においては grāhyagrāhakabhāva は虚妄分別の上にある「存在しないもの」という意味で登場する。従来、この中の bhāva の語は「体」「もの」「実物」等の訳語が与えられていたが、近年は「関係」と訳される場合が多い。これに対して bhāva が「関係」という意味には取れないことを安慧釈に基づいて論証する。安慧釈では bhāva が svabhāva, ātman, rūpa と言い換えられている。これは虚妄分別の有相と無相とに同時に言及する文脈に限定される。これによって bhāva 等の語は虚妄分別という一つの対象に存在する、あるいは存在しない性質や状態を指示する語であることが分かる。従って、grāhyagrāhakabhāva は「所取・能取の関係」ではなく「所取・能取性」と訳すことが適切である。ただ、これは唯識学派が「所取・能取の関係」を認めないことを意味するのではない。『中辺分別論』に説かれる「入無相方便」は所取・能取の相互依存関係を前提としているからである。

《結論—テキストと翻訳》以上が本論文を構成する各章の内容である。金俊佑氏は上記4

章をまとめた要約を結論として提示し、その後で、本論文中の論述にあたって主として用いた『中辺分別論』第1章「相品」後半部の「空性章」について、世親釈の梵文再校訂テキストと和訳、安慧による復釈の梵文再校訂テキストとチベット語訳テキストに和訳を添えて提示する。安慧釈の梵文テキストはカトマンドゥの国立公文書館に保存されている世界唯一の梵文写本から金俊佑氏自身によって再校訂されたものである。

〔2〕 審査結果の要旨

本論文において金俊佑氏は、瑜伽行派（唯識学派）の最初期の文献の一つである『中辺分別論』に示される空性説をめぐる様々な問題を取り上げ、文献学的な考察を試みている。氏の関心は、主に瑜伽行派に特徴的な「無の有」や「空性」といった概念に向けられており、これらと密接に関わる「空性の定型句」「三性説」「虚妄分別」「所取能取性」などの概念を取り上げて分析している。世界的に見ても、金俊佑氏の母国である韓国も含めて瑜伽行派文献の研究に携わる研究者は多く、氏を取り上げる課題は先行研究で繰り返し議論されたものではあるが、氏は先行研究を丹念に調べ上げ、これまで見落とされていた問題を明らかにしている。近年では瑜伽行派の思想は研究され尽くされた感もあり、とすると些末な議論に陥りがちであったが、氏が瑜伽行派研究の本流に果敢に正面から挑み、しかも独自の成果を上げたことは、同分野の研究に携わる者に少なからぬ刺激を与えるものと確信する。また、大乘仏教哲学に関わる複雑な論述を、佛教大学に留学してから学んだ日本語によって成し遂げたことも賞賛に値する。さらに、氏は『中辺分別論』に対する安慧の復釈の關係箇所をカトマンドゥの梵文写本から校訂し直し、対応するチベット語校訂訳テキストを付したうえで、和訳を提示している。こうした原典資料の提示も極めて貢献度の高い研究成果と言える。

ただ、本論文における金俊佑氏の研究が極めて有意義なものであると評価した上のことではあるが、再考を促したい点も散見される。まず三性説の歴史的変遷を論じる中で、氏は「弥勒請問章」の「遍計・分別・法性」よりなる三相説が、典型的な「遍計所執・依他起・円成」の三性説に先行して成立していたと考えている。その理由を「三性を登場させる『中辺分別論』の「真実章」は初期仏教以来の種々の既存の教説を三性という根本真実の中に包摂させる意図で書かれたものだからである」としている。端的に言えば、『中辺分別論』の偈において「遍計・分別・法性」型の三性が、世親の釈論において「遍計所執・依他起・円成」型の三性説で解釈されている点に着目し、偈において三性説の古形を引き、それを新しい形の三性説で説明し直したと解釈している。この見解は一理あると言えるが、この記述のみから三性説の歴史的変遷のすべてを論じたと言い切ることは難しいように思われる。

さらに氏は『阿毘達磨集論』の中で「遍計・分別・法性」によって蘊界処の無我が解釈されている点を取り上げる。氏によれば、『集論』は「遍計・分別・法性」を「遍計所執・依他起・円成」型の三性説と関連付けていない。一方、『摂大乘論』の無性釈など、後代の文献では「遍計・分別・法性」型を「遍計所執・依他起・円成」型で解釈する。このことから、氏は「遍計・分別・法性」の三性が当初は空性として解釈されていたが、後に「遍計所執・依他起・円成」の三性説と関連付けられたとする発展史を想定し、『集論』が『中辺分別論』よりも先行するという結論を導く。氏の解釈は、文献の成立事情と文献に残された概念の前後関係を画一的に捉えすぎているように思われる。時代的には後に成立した文献に、古い思想が記述されている可能性も否定できない。概念の前後関係から直ちに文献の成立順序を推定することには慎重な考察が必要であろう。

三性説の変遷過程に関する氏のもう一つの見解として、『解深密経』の三相説と『中辺分別論』等の諸文献との相違が考察されている。『中辺分別論』等では依他起性は「分別」とされるのに対して、『解深密経』の三相説では依他起相を「縁起」としている点に特徴があることは従来指摘されていた。このことから、一般に『解深密経』の三相説は識説と関連づけられていないと評価されることもある。氏は同様のことが円成実性についても当てはまることを指摘し、『解深密経』の特殊性を示す。確かに、指摘通り三性説だけに着目すると、『解深密経』の説は他の文献と比べて異質なものに見えるが、三無自性説まで視野に入れると、必ずしも思想的に大きな相違があるわけではないことが分かるはずである。考察範囲をもう少し広げて検討することが望まれる。

次に本論文の主題のひとつである「無の有」について、瑜伽行派の文献のみならず、中観派の難解な文献まで分析している点は高く評価できる。しかし、その解釈に問題がないわけではない。氏は、従来繰り返し分析されてきた『小空経』の「空性の定型句」を取り上げ、瑜伽行派の文献における解釈を綿密に分析している。その中で『顕揚聖教論』にも言及する。氏は『顕揚論』の「若於此無有 及此餘所有」という偈を引用し、「もし、ここに無があり、また、ここに余るものがあれば」と解釈する。しかし、これは「空性の定型句」を偈の形で表したものと見た方が理解しやすい。氏が「もし、ここに無があり」と訳した「若於此無有」は、「あるものがここに存在しない場合」と読むべきであり、「無の有」を読み取る氏の解釈に反して、何かが存在しないことを述べていることになる。また、氏は清弁の『般若灯論』に見られる瑜伽行派批判を取り上げ、「無の有」の理解の問題点を論じている。その際、*ngos po med pa* というチベット語を「無の有」と訳しているが、このチベット語訳が梵語の *abhāvasya bhāvaḥ* に対応する表現であるとは考え難い。氏が提示する二つ目の引用文の終わりの部分には *med pa'i ngos po* という表現があり、これは明らかに *abhāvasya bhāvaḥ* すなわち「無の有」に対応する訳語であり、氏もそのよう

に理解している。それに対して、*dn gos po med pa* は *abhāva* を予想させる表現であり、むしろ「無」を意味していると考えられる。これらは「無の有」という概念を読み取ろうとするあまり、文献の理解が不正確になってしまった例と言える。

さらに、翻訳に関する考察も氏の論文の重要な論点になっている。氏は第4章において、*abhūtaparikalpa* と *grāhyagrāhakabhāva* という二つの複合語の翻訳について、従来の解釈の問題点を文献学的手法によって明らかにしている。その結果、これまで当然のように受け入れられてきた解釈や訳語を改め、より厳密な解釈を提示することに成功している。氏にとっては外国語である日本語の翻訳の問題にまで踏み込んだ研究成果は、氏の並々ならぬ努力の跡がうかがえるものである。ただ、*grāhyagrāhakabhāva* の考察については、この問題の背景から考えても、別の角度からの考察も必要であったと思われる。先行研究では、*grāhyagrāhakabhāva* を「所取・能取関係」と訳すべきか否かを問題としている。すなわち *bhāva* の訳し方が問題になっている。その背景には、論理学文献では *sādhyaśādhanabhāva* を「能証・所証関係」と訳すことがある。論理学文献の場合の「関係」は *sambandha* で置き換え可能なものであり、したがって「同一関係」と「因果関係」という事実に基づいた関係が念頭に置かれている。こうした関係が成り立つ場合に正しい推理が可能になることはよく知られている。しかし、*grāhyagrāhakabhāva* の場合、所取と能取の間には、論理学文献で考えるような同一関係も因果関係もない。その意味で、*grāhyagrāhakabhāva* に「関係」という訳語を導入する必然性がない。こうした観点からも考察していれば、氏の主張はより明快で、堅固なものになったと思われる。

以上、金俊佑氏の論文に見られる問題点を指摘したが、これらは氏のこれからの研究の可能性を示唆するものであり、決して評価を下げるものではない。氏が文献の解釈に真摯に取り組み、その過程を隠さず記したからこそ、問題が見えやすくなっているだけであり、むしろ氏の研究姿勢の堅実さを示すものとして評価されるべきものとする。よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいと判断する。